

もっとうよ！オキナワ！

第28回 護郷隊—知られざる少年兵

人権擁護委員会 沖縄問題対策部会 部会長 藤川 元 (35期)

1 護郷隊の存在

太平洋戦争の末期にたたかわれた沖縄戦では、師範学校、中学校などに在籍する10代の男子学生が鉄血勤皇隊、学徒隊として従軍し、また師範学校、高等女学校などに在籍する10代の女子学生が学校ごとに、ひめゆり学徒隊、白梅学徒隊などとして従軍し、本島の中部、南部戦線を中心として多くの犠牲者を出したことが有名である。

しかし、これらとは別に、沖縄本島北部、中部の地域から選抜された少年兵が、兵士不足を補うため、陸軍中野学校出身者によって編成される護郷隊とよばれる組織に組み込まれて従軍したことは、あまり知られていない。

川満彰「陸軍中野学校と沖縄戦」（吉川弘文館）によると、以下のとおりである。

陸軍中野学校とは、大本営陸軍部（のち参謀本部）直轄で特殊任務を実践するための要員養成機関である。大本営では沖縄の陸軍守備隊である第32軍に遊撃隊を編成することを命じた。そして第32軍は、米軍が沖縄本島中部西海岸から上陸し、第32軍司令部のある南に進行するとにらんでいた。その米軍を背後から襲うことを目的に、遊撃隊を沖縄本島北部に配置することとした。一方、中野学校出身者で編成される特務隊は、諜報・防諜・宣伝活動などを行ない常に第32軍の戦況を大本営へ送信するなど行なうこととした。

護郷隊は第1護郷隊、第2護郷隊の2隊が編成され、中野学校出身の将校らを幹部とし、分隊長に集落出身の在郷軍人等を充て、その下に少年たちを組入れた。このように集落単位でのメンバーとしたのは故郷は自らの手で護る意識が高くなる、とするためである。

当部会は、2019年2月に実施した沖縄視察で川満氏を訪ね、同年6月に開催したシンポジウムに同氏を講師としてお招きし、護郷隊について直接お話をうかがった。

2 護郷隊の活動

- (1) 護郷隊の召集は1944（昭和19）年10月23日に始まり、以後数次にわたり、約1000人の少年兵が入隊した。第1護郷隊は沖縄本島北部の多野岳、名護岳を中心として、第2護郷隊はそれより南の恩納岳を中心として陣地を構築した。1945（昭和20）年4月初旬、第1護郷隊は、名護から上陸した米軍と、第2護郷隊は本島中部西海岸から上陸した米軍主力と、それぞれ対峙することになった。
- (2) 護郷隊は少年が中心となって編成されているとはいえ、本格的な戦闘行為を荷わされた。米軍の戦車を手榴弾と爆薬で爆破する作戦、米軍の砲台を攻撃すること、銃の射撃による戦闘など、さまざまである。
- (3) 護郷隊は米軍に追われ、6月23日（22日との説もある）には第32軍司令官が自決し、軍としての組織的抵抗が終結したことから、その後しばらくして一旦自宅に帰された。その後、再度の召集がないまま終戦を迎えた。護郷隊として召集された少年兵のうち約160名が戦死した（「2」につき川満彰・前掲書）。

3 ショッキングな出来事

- (1) 第2護郷隊に所属したNさん（当時15歳）は、米軍に追いつめられて野戦病院から撤退するにあたり、恩納村にある野戦病院近くで軍医が、心身に故障をきたし撤退の足手まといとなる少年兵（当時17歳）を拳銃で射殺する現場を見た。射殺されたのは、高江洲義英さん。Nさんと同じ村の出身。義英さんは谷間の崖に座らされ毛布をかぶせられた状態で軍医が拳銃を発射した。ところが1発目ははずれた。義英さんはかぶっていた毛布をとって、あはははは、と笑った。その毛布をかぶせられてもう1発発射したところ、シーンとなった。Nさんは、



少年護郷隊の碑（名護市大西）



第二護郷隊の碑（恩納村安富祖）

この話を戦後も長い間、ごく限られた人にしか話さなかった。義英さんの家族には話せなかった。義英さんよりも10歳下の弟である義一さんは、長らく、兄は恩納村で負ったケガがもとで死亡したと思っていた。しかし2015年6月23日、慰霊の日に恩納村にある第2護郷隊の碑で追悼式が行われた際、Nさんと義一さんはここで会った。Nさんは、随分とためらったが、義一さんに、自分の見たことを話した。義一さんは大きなショックを受けたが、話してくれたNさんには感謝の弁を述べ、真実を知ることができてよかったと思った（川満彰・前掲書、NHKスペシャル取材班「少年ゲリラ兵の告白」（新潮文庫）、三上智恵「証言 沖縄スパイ戦史」集英社新書、西日本新聞2020. 6. 22）。

- (2) この事件での軍医をどう考えるべきか。軍医は殺人を犯したのである。これが、上官からの命令に基づくものかどうかはわからない。仮に、軍医一人の考えによるとしても、「生きて虜囚の辱めを受けず」との戦陣訓（1941年、東条英機陸軍大臣による示達）や「死傷者は万難を排し敵手に委ねざる如く勉むるを要す」と定められた陸軍の「作戦要務令第3部」によるならば、野戦病院の撤退時には重傷者は敵に渡さないために殺害することも容認するのであり、軍医は陸軍の方針に忠実に従ったことになる。これは、戦争だから仕方なかった、として、あいまいなまま済ませるべきことではなく、人命を軽視する戦陣訓などを通用させてきた原因を解明するとともにその教訓を今後役に立てるべきだと思う。

4 少年を兵とすることについて

護郷隊の召集については、戦況のひっ迫によって召集年齢が引下げられてきたこと、召集施行日より前に行なっていること、召集年齢に達しない少年を志願という形で召集すること、の是非が問題となる。

しかし、召集年齢にも達しない14歳の少年でも志願すれば召集できる、という体制については、当時の強力な愛国教育によって考える力、拒否する自由を奪われた中での志願は、志願というには不適切である。さらに重要なことは、本来、国は少年を守らねばならないはずである。少年に、国、社会の将来を託すという意味で大切な人材である。これを戦火にさらすようなことをしてはならない。

連合艦隊が1945（昭和20）年4月5日、戦艦大和に対して海上特攻として沖縄突入を命じた際のことである。4月6日に出航する前日の4月5日、艦内放送で連合艦隊の命令書が読み上げられた。その直後、司令官らによる「候補生退艦用意」との命令が発せられた。これは、海軍兵学校を卒業したばかりの少尉候補生49名に退艦を命じたものである。候補生らは退艦を拒んだが、司令官は受けなかった。候補生らは、今は足手まといであるが生き残れば将来、海軍を背負う士官になりうると判断したゆえのこと（栗原俊雄「戦艦大和」岩波新書、吉田満「戦艦大和」角川文庫）。非情な作戦の中にあっても、かろうじて失われない若い命もあった。

米軍の本土侵攻を少しでも遅らせるための捨て石作戦として沖縄戦は戦われた。そのために犠牲になった少年兵がいたことを本土の人は忘れてはならないであろう。